



## 延期中の日本植物分類学会第10回大会について

3月14日、東日本大地震と大津波による大災害の衝撃がさめないなか、3月19-21日に筑波で開催予定の日本植物分類学会第10回大会と日中韓3カ国合同シンポジウムの開催延期をお伝えさせていただきました。その後、大会準備委員会で更に開催を検討してきましたが、予定の会場が復旧しないこと、その他の会場の確保が難しいことから開催を断念せざるを得ないという判断をいただきました。加えて未だに余震も続き、原発からの放射能汚染も収束の見通しが立たない中ではやむを得ないことと、会員の皆様もご了承いただけるものと思います。

それを受けて、4月に評議員会を開催し、延期中の日本植物分類学会第10回大会に関する措置を検討してまいりました。その結果、「日本植物分類学会第10回大会・国際シンポジウムは、講演要旨集の発行をもって成立し、研究発表がなされた」とすることに決定しました。ここに会員の皆様へこの決定をお伝え致します。

大会参加費等の事前に支払われた費用各種の取り扱いを含む全体の措置については、大会準備委員会と東アジア植物分類学国際シンポジウム2011実行委員と学会会長の連記による「日本植物分類学会第10回大会・国際シンポジウムの取り扱い」をご覧ください。また、大会準備委員会委員長の岩科司氏からは経緯を説明された文書も頂きました。メーリングリストで送らせていただいた他、学会ホームページにも載せてありますのでご覧ください。

長期間にわたって大会開催を準備し、直前になって開催延期し、今さらに開催を断念せざるを得なくなった大会準備委員会の皆様には、ご苦勞に対して深く感謝したいと思います。なお、発表機会を失ったシンポジウムの一部は、9月開催の日本植物学会にて発表されることになりました。また例年3月大会時にあわせて開催してきた総会も開催するよう検討しておりますので、日程と場所が決まり次第お伝え致します。

日本植物分類学会 会長  
戸部 博

### — 日本植物分類学会第10回大会・国際シンポジウムの取り扱い —

過日、日本植物分類学会第10回大会・国際シンポジウムは延期するとお知らせしましたが、その後も近い時期に開催できる見通しが立っておりません。そこで、大会およびシンポジウムについて以下のような措置をとることとなりました。

日本植物分類学会第10回大会・国際シンポジウムは、講演要旨集の発行をもって成立し、研究発表がなされたこととします。

前納されていた「大会参加費」、「懇親会費」、および「弁当代」の取り扱いを以下のようにいたします。

(1) 緊縮予算のもとで準備がなされてきましたが、これまで予算を執行した要旨集の印刷代等、また、これから行う要旨集発送や下記の返金手続きにかかる経費などを合計すると、大会参加費収入とほ

ほぼ同額になります。したがって収支差額が生じないため、「大会参加費」についてはお返ししないものといたします。

(2)「懇親会費」および「弁当代」は返金いたします。ただし、これらの返金分を東日本大震災の義援金として寄付することにご賛同いただける方については、大会準備委員会がまとめて寄付の手続きを行います。ご賛同の方におかれましては、その旨を大会準備委員会 (biodiversity@kahaku.go.jp) までご連絡いただくことで処理を行います。また、返金のための郵便為替(小為替)は要旨集とともにお送りします。換金の手数料については各自のご負担とさせていただきます。

日本植物分類学会会長  
日本植物分類学会第10回大会準備委員会  
東アジア植物分類学国際シンポジウム2011実行委員

## 諸報告

---

### 2011年度第2回メール評議員会議事抄録

---

庶務幹事 西野 貴子

2011年4月4日～4月11日に2011年度第2回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は日本植物分類学会第10回大会・国際シンポジウムの取り扱い案を評議員の方々に審議していただくためのものです。

開催日時：2011年4月4日～11日 17:00

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

#### 議長選出

慣例に従い学会会長の戸部博氏を議長とすることに反対はなかった。

#### 審議事項

第1号議案 日本植物分類学会第10回大会・国際シンポジウムの取り扱い案

#### 審議結果

第1号議案は、賛成多数(承認10(委任状なし)、不承認1, 白票2)で承認された。

議事録署名人として仲田崇志氏と藤井紀行氏が選出された。

## 庶務報告(2011年2月～4月)

---

庶務幹事 西野 貴子

・平成22年度絶滅危惧植物の分布状況等調査業務に係わる業務終了報告書を環境省に提出した。(4月6日)

## お知らせ

### 『APG』および『分類』のオープンアクセスについて

図書幹事 鈴木 武

これまで日本植物分類学会が発行している英文誌『APG: Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』および和文誌『分類』は、国立情報学研究所の論文情報ナビゲーター CiNii で発行後 2年経過ののちに公開されてきていました。

2010年3月の評議会の議決を受けて、2011年度より、発行後にすみやかに公開されるようになりました。実際に公開までは数ヶ月を要しますが、2011年4月時点ではAPGは61巻1号(2010年6月)、分類は10巻2号(2010年10月)までが公開されています。

また、合併前の植物分類地理学会の『植物地理, 分類』(1~51巻)も合わせて公開しています。CiNiiへの会員登録・料金の必要はなく、以下のアドレスから閲覧できますので、ご利用下さい。

[http://ci.nii.ac.jp/organ/journal/INT1000001576\\_ja.html](http://ci.nii.ac.jp/organ/journal/INT1000001576_ja.html)

### 2011年度野外研修会参加者募集のお知らせ(第2回)

東 隆行

野外研修会参加申込の締め切りは6月10日です。まだ定員に達していませんので(5月16日現在)、ご希望の方は下記申込先までご連絡ください。以下はニュースレターNo.40(2月号)からの抜粋です。

「樽前山の高山植物と針広混交の原生林, 八剣山の植物」

日程: 2011年7月8日(金) ~ 7月10日(日)

参加費用(新千歳空港到着から解散までの宿泊費用, 朝夕の食事代, 懇親会費, 集合から解散までのバス費用, 冊子資料代など): 25,000円程度(参加者の人数により多少増減する場合がありますのであらかじめご了承下さい)

申込み: 〒060-0003 札幌市中央区北3条西8丁目

北海道大学植物園 東 隆行 宛

TEL: 011-221-0066(呼出), FAX: 011-221-0664

E-mail: [azuma@fsc.hokudai.ac.jp](mailto:azuma@fsc.hokudai.ac.jp)

できるだけメールでお申し込み下さい。尚、郵便やファックスでも受け付けます。申込みの際には、氏名、性別、連絡先住所、電話番号(なるべく携帯番号)、メールアドレスを明記していただき、6月10日までにお申し込みください。申込み順に20名で締め切らせていただく予定です。

## 寄稿

### 学名のラテン語(8)

永益 英敏 (京都大学総合博物館)

#### 学名を発音する

学名は基本的に「書き言葉」であり、それゆえにこそ世界各国で同じ綴りで扱われうるともいえる。中国語を発音し語らない日本のような周辺民族にも漢字が利用され続けてきたことを考えてみればそのことは理解できよう。しかしながら音声によるコミュニケーションにおいては学名を発音しないわけにはいかないのも事実である。そして残念なことに学名の発音について標準的な取り決めは存在していない。ラテン語をあたかも漢文のように国際的な文書や学術書に用いてきた西欧諸国においては、日本における漢字の音読みのように、それぞれ歴史的に用いられてきた慣用的な読み方があり、それは本来のラテン語(たとえば古典ラテン語)の発音とは異なるものである。我々がラテン語として扱われる学名をどう発音すればいいのかについて悩むのは、ラテン語が日本人の文化的背景の中に存在していないからであることはいまでもない。

さて、それでは私たちはどのように学名を発音するのがよいだろうか？ 一つは本来のラテン語の発音で読むことである。言語学的に再構成された古典ラテン語の発音はラテン語の入門書の最初に必ず出てくるので、詳しくはそれを参照されたい。短母音には a, e, i, o, u とギリシア語からの外来語としての y(ドイツ語の ü, フランス語の u のような音)しかないので日本語との相性もよく、基本的にはローマ字読みすればよい。注意すべき点は、c は必ずカ行/k/, j はヤ行の音, qu は/kw/, v はワ行/w/, s は常に清音/s/, x は常に/ks/, z は濁音/z/であることである。h はハ行の音だが、子音の後の h は多くはギリシア語由来の語に含まれ本来は帯気音であるがほとんど無視してよい。たとえば schola(学校)はスコラのように発音され、シヨラではない。

ラテン語の母音には長短があつてこれによりアクセントの位置が変わるのだが、これを知るのはいささか難しい。ラテン語の辞書をひくと、短母音には  $\breve$ 、長母音には  $\bar{\text{}}$  の記号で長短を示してある(後者だけのことも多い)が、学名についてはそもそも単語が載っていない場合がほとんどなのでがっかりするばかりである。いくつかの古典語由来の学名には有効で *Rosa*(バラ)は *rōsa* と短母音で、*Malus*(リンゴ)は *mālus* と長く、*mālus*(悪い)ではないことがわかる。ただし、古典ラテン語の長母音は短母音を長く伸ばすだけであるので多くの場合たいした問題ではない。二重母音は ae, au, ei, eu, oe, ui の 6 つでアエ、アウ、エイ、エウ、オエ、ウイのように発音される。学名でよく出てくる *-oides* の oi は二重母音ではなく *-ō-i-des* である。古い文献では分音記号をつけて *-oīdes* と書かれていることがある。上位分類群の学名語尾に頻出する *-eae* もまた *-ē-ae* で 2 つの音節からなっている。

もう一つは現代の国際語である英語風に発音することである。英語での発表や会話中では学名だけ古典ラテン語の発音をするよりもおさまりがよい。英語におけるラテン語の伝統的な読み方では、c と g が後の母音により発音が変わることに注意したい。c は a, o, u の前では/k/, e, i, y の前では/s/となる。同様に g も a, o, u の前では/g/, e, i, y の前では/dʒ/となり、j も/dʒ/とジャ行の音である。v は/v/と濁り、ph は/f/の音で発音される。また ti が語中では英語の nation のように/ʃ/となる。

英語風ラテン語の発音の場合に問題となるのは母音の長短である。短母音の場合にはアのように発音される  $\breve{u}$  を除いて古典ラテン語の読み方と同じだが、長母音の場合には  $\bar{a}$ ,  $\bar{e}$ ,  $\bar{i}$ ,  $\bar{o}$ ,  $\bar{u}$ ,  $\bar{y}$  はそれぞれエイ、

イー, アイ, オウ, ウー, アイのように発音される。二重母音 ae, au, ei, eu, oe, ui はそれぞれイー, オー, アイ, ユー, イー, ウイである。Julius Caesar(古典ラテン語でユーリウス・カエサル, 英語風にジュリアス・シーザー)の有名な「来た! 見た! 勝った! Vēnī! Vīdī! Vīcī!」は古典ラテン語では「ヴェーニー! ヴィーディー! ヴィーキー!」だが英語風ラテン語の発音では「ヴィーナイ! ヴァイダイ! ヴァイサイ!」である。

教会ラテン語ではイタリア語の影響を受けて ci や ce がチ, チェと発音される(「ヴェーニー! ヴィーディー! ヴィーチャー!」)。ae, oe はエである。

なおアクセントは基本的に後ろから 2 つめの音節にあり, その音節が短い場合にはその前の音節にある。音節の長さやアクセントについては古典ラテン語の入門書をみていただきたい。

ラテン語やギリシア語由来の語は上に述べた規則でほぼ発音できるが, 学名の場合にはそう簡単ではない。Stearn (1992: 53)によれば, 属名の 80%, 種の形容語の 30%はその他の言語由来である。このような学名をすべてラテン語の規則で発音しようとするのは基本的に無理なのである。現代語の地名や人名に基づく学名のような場合, 原音に近く発音し語尾のみをラテン語として発音するのが実際的であると思う。

さて実際に植物学者は国際会議などでどのように発音しているかという, わりといい加減である。いろいろな理由があると思うが, それぞれの国や言語によって読み方が違うというのが一番大きな理由であろうと思う。また, もともとラテン語やギリシア語由来ではない学名が多いのも統一的な読み方が期待できない理由であろう。もっとも学名の綴りが聞き手にもわかっていればよほど逸脱した読み方をしない限り大きな混乱はない。日本人にとっては, むしろ母音のないところに母音を挿入したりしないこと, lとrの区別をきちんとする, といったことの方が重要である。

イギリス人の植物学者が, きちんと英語風ラテン語の発音をしているかというそうでもない。先日, 国際シンポジウムで発表していたキュー植物園の友人の学名の発音が, 古典ラテン語でも英語風ラテン語の発音でもなかったの聞いてみたところ, すでに中高校においてラテン語の講義はなく, ラテン語の読み方は我流だという。英語風のラテン語発音は母音の長短がわからないと正しく発音できないので学名に厳密に適用しようとするのは基本的にむずかしそうである。私は古典ラテン語風に発音するのが好んでいる。そのままローマ字読みすればいいので楽だし, 英語風では日本語の中ではちょっと気取りすぎ(?)。もう 15 年ほど前になるが, キュー植物園に標本を見に行ったとき当時の標本館長の Lucas さんに「その発音はどこで習ったのか」と驚かれたことがある。古典ラテン語の発音はイギリスではなるほど言語学者くらいしか使わないのかもしれない, と思ったことであった。

#### 参考文献

- ベイリー, L. H.(著), 編集部(訳). 1996. 植物の名前のつけかた—植物学名入門. 八坂書房. (pp. 147–150 に「学名の発音」, pp. 151–221 に属名と種の形容語について, 具体的な学名の発音を示したリストがある)
- 松平千秋・国原吉之助. 1979. 新ラテン文法(第4改訂版). 南江堂, 東京.
- 皆川達夫. 1965. 合唱音楽の歴史. 全音楽譜出版社, 東京.
- 三ヶ尻 正. 2001. ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック. ショパン, 東京. (第4章「ミサ曲」とラテン語, 第5章「ミサ曲」の発音・ディクショ[n]「古典式, イタリア式, ドイツ式の発音の違いが述べられている」)
- Stern, W. T. 1992. Botanical Latin, 4th ed. David & Charles, Newton Abbot Devon. (pp. 51–54 にラテン語の発音についての解説. pp. 52–53 に Reformed academic と Traditional English の発音の違いの表がある)

## 過去の野外研修会開催地

東 浩司 (京都大学大学院)

これまでの野外研修会の開催場所については、ニュースレターNo.1(pp.16-17)および No.30(p.5)にまとめられてありますが、表形式になっており、国内のどの場所で行われてきたのか(または行われていないのか)がすぐに把握することは難しいと思います。私は 2009-10 年の間、庶務幹事を務めさせていただきましたが、毎年の野外研修会の開催場所を探す(お願いする)に当たって、これまでの開催場所が日本地図上で一目で分かるといいなあとと思い、作成したものが下の図です。何かのお役に立てばと思い、寄稿させていただきました。あくまでも便宜的に作成したもので、一度の研修会で複数の場所を回ったとしても 1 点のみで表示してあります。そのため、厳密には合っていない場合もありますが、ご容赦ください。

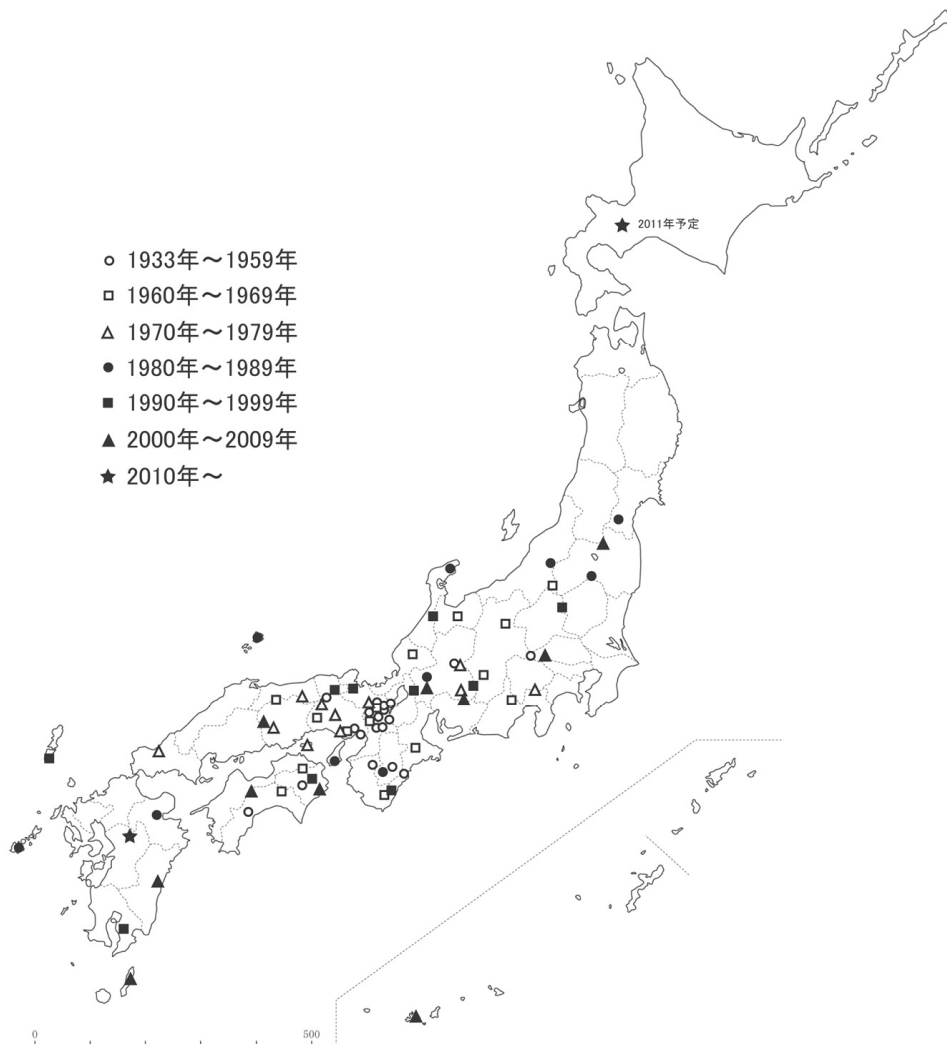


図. これまでに野外研修会が行われた地域.

## 「生物学名勉強会」のご案内

仲田 崇志 (慶應義塾大学), 大田修平 (University of Oslo)

分類学者にとって正しい学名の取り扱いは最も重要な仕事の一つです。しかし国際植物命名規約の読解や、正しい学名の命名や選択は独学では難しいのが実状です。また最近では Draft BioCode 2011 による命名規約の統合に向けた提案などもあり、動物や原核生物の命名規約への理解も求められています。そこで植物・動物・原核生物の学名や命名規約に関する質問や意見交換の場として、2010年9月より「生物学名勉強会」を始めました。現在はメーリングリスト(GAKUMEI)による活動を中心として、例えば学名の取り扱いや新種の記載について質問し合ったり、命名規約の解釈や改正案について意見交換を行っています。どなたでもご参加いただけますので、ご興味のある方は下記の方法でお申し込み下さい。なお詳細は以下のウェブサイトにも掲載しております。

生物学名勉強会 : <https://sites.google.com/site/gakumeikai/>

### 参加方法

(1), (2)のいずれかの方法でお申し込み下さい。なお(2)の場合、過去ログの閲覧ができませんので、(1)の方法でのご登録をお勧めします。(2)の方法でもメールの送受信は可能です。

(1) Google グループの「生物学名勉強会」(<https://groups.google.com/group/gakumei/>)のページから登録(Google アカウントが必要ですが、簡単に作成できます)。

(2) 下記マネージャのいずれかに、1. 名前, 2. 所属, 3. 名前, 所属の公開の可否, 4. 配信を希望するメールアドレスをメールにて連絡。

仲田 崇志(慶應義塾大学) : [naktak@ttck.keio.ac.jp](mailto:naktak@ttck.keio.ac.jp)

大田 修平(University of Oslo) : [ohdashuhei@gmail.com](mailto:ohdashuhei@gmail.com)

## 研究での失敗談

### 湿潤熱帯林で怖いもの

岡田 博 (兵庫県立大学客員研究員)

湿潤熱帯林(図 1)では、日本での野外調査の時とはちょっと違う状況に出会い、戸惑うことがある。特に注意しないといけないのは毒蛇だが、研究者仲間て蛇にかまれて大変なことになったのを聞いたことがない。あると思うが非常に珍しいことと思う。私も毒蛇を見たことは時々あるが近づかなければ大丈夫だ(図 2)。ところが意外にも以下のような大変な思いを何度か経験している(注: 以下は幼児期の体験ではない)。

1. アリ: ライオンになったような気持ちで以下の経験を記す。ある時、興味深い植物を見つけ、枝先を切り取り持っていたビニール袋に入れた。次の植物を求めて歩いていたら、なにやら袋を持つ手元がチクチクと痛む。よく見ると袋いっぱいにごま粒



図 1. ショクダイオオコンニャクの葉の下で。



のような模様が見える。しかも動いている。なんと袋いっぱいになりがうごめいている。木の葉の裏に巣を作るアリを巣ごと採集していたのだ。アリは怒り狂って袋の中を走り回っている。採集した枝を標本にする前に、アリが袋から退散するまでかなりの時間をあれこれ試しながら無駄に過ごしてしまうのであった。

2. ハチ: フィールドノートによると、1993年3月16日インドネシア西スマトラ州パダン郊外で黄色のスズメバチに刺されている。小高い丘の斜面にあった巣のすぐそばを通ってしまったのだ。同じ個体にまず左手人差し指の付け根に1発目、次いで左あごに2発目、最後に右肩に3発目を刺された。見ているとかなり執拗に何十度も針を突き刺している。数十分の後に左腕はひじのあたりまでパンパンに腫れたが、あご(顔)や右腕は何ともなかった。貯めていた毒はあまり多量にはないらしく、第2、第3の攻撃は効果軽微で終わったのは面白かった。最初のことだったので笑って終わったが、何度か同じ種類のハチにやられれば死ぬかもしれないくらい大変に危険な体験だった。

3. 毛虫(ガの幼虫): 調査中に毛虫が首元にぼりと落ちてきた。思わず振り払ったのがいけなかった(そっとしておいてご退散願うべき)。首の周りがものすごくかゆくなってしまった。慌てて近くの水の流れて洗ったのが余計にいけなかった。毛先が表面張力で水の表面に広がっていき体のあちこちに広がって、ほとんど半身にひどいじんましんが出てしまった。

こんな些細なことが調査全体に大きな影響を与えることもある。気をつけなければ、未だにフィールドワークをあきらめきれない身としては改めて気を引き締めている。



図2. 毒蛇(グリーンスネーク)2種.

## いきもの便り

### 縁の下の力持ち

山田 俊太郎 (京都大学大学院)

野生のソテツはどのような場所で生きているのだろうか? 九州で育った私には、ソテツは身近な植物であり、学校への通学路にも街路樹として生えていた。そんな身近な植物であったのだが、卒業研究としてサンプリングを行うために自生地を訪れて驚いた。宮崎以南の岩場や砂地にあるのがほとんどだからだ。体が大きいのに、どうしてソテツはそんな貧栄養な環境で生きていけるのだろうか? その秘密は根にあったのだ。サンゴ根(図1)という、ソテツ特有の特殊な根に。

サンゴ根の中(皮層)には *Nostoc* というシアノバクテリアが共生している。こいつが空気中の窒素を使い、窒素固定をしてくれるから、ソテツは貧栄養な環境でも生きていけるのだ。まさに *Nostoc* は「縁の下の力持ち」なのである。



図1. ソテツのサンゴ根

断面図(図2)を見ると分かるように、*Nostoc* は緑色をして、皮相の中にリング状で存在している。皮層の中にリング状でしか存在しないのは、ソテツがそれ以上の侵入を防ぐように、フェノール化合物

を出しているからであるが、緑色をしているというのは非常に面白い。地中のサンゴ根の中という光の当たらない環境に存在しているのに、クロロフィルを持っているのだ。光合成をしていないのに緑色をしているなんて、*Nostoc* はなんと不思議なやつなのだろう。

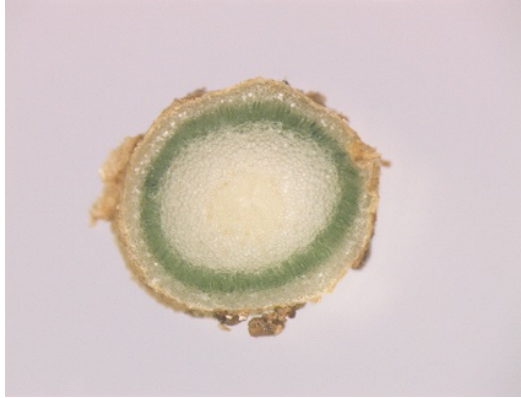


図 2. サンゴ根の断面

また、1つのサンゴ根の中にある *Nostoc* は1種だけでなく、複数が存在していることもあるということが私の研究で明らかになった。これは、たまたま複数が同時に侵入したからなのか、それとも、1つが侵入した後で別のものが侵入したからなのかは分からない。

もう1つ、私の研究で分かったこととして、共生する *Nostoc* とソテツの間には地理的な相関がないということがある。このことから考えると、地中に存在している *Nostoc* を無作為に取り込んでいるのではないかと思われるが、はっきりとしたことはよく分からない。というのも、未だにその侵入プロセスが分かっていないからだ。

侵入プロセスの解明、非常に難しい問題ではあるだろうが、今後の研究の進展が待たれるばかりである。

## 近刊本の紹介

### Early Flowers and Angiosperm Evolution

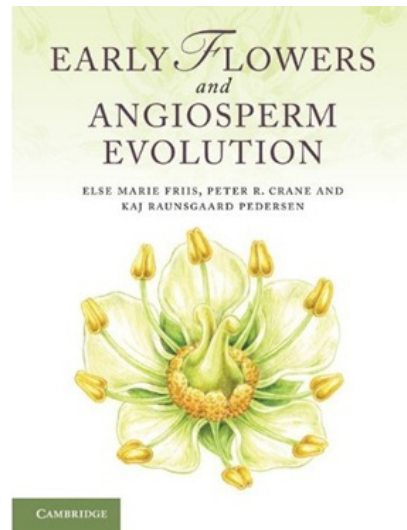
Else Marie Friis, Peter R. Crane, Kaj Raunkjaer Pedersen  
Cambridge University Press (2011/11 月頃出版予定),  
550 ページ

ISBN-10: 0-521-59283-6

ISBN-13: 978-0-521-59283-3

Peter Crane から新しい本を書いていると言う話を聞いたのは、今から 16 年も前のことであった。それ以来、Crane に会うたびに、彼は本の原稿を書いていると話していたが、はたしていつになったら出版されるものかと、長い間気長に待ち続けていた。その本が今年の 11 月(予定)について出版されることになった。

昨年、深まりゆく秋に Yale Univ に行った折に、Crane が 1500 枚以上にもおよぶ未発表の全原稿をみせてくれた。これが今年の 11 月(予定)に出版される『Early Flowers and Angiosperm Evolution』の全原稿であった。



この本は、被子植物の化石に関する新たな多くの情報が盛り込まれており、被子植物の初期進化を理解する上で必須の本となるであろう。植物分類学、古植物学、植物系統学、進化学、植物生態学に関係している多くの人々に広く活用されることを希望している。(高橋 正道, 新潟大学)

## 書評

### ミクロの自然探検

矢追 義人／著 文一総合出版／発行 ISBN978-4-8299-1129-7

定価 1,890 円 A5 版 144 ページ

身近な 14 種の植物について、ミクロの視線で明らかになった発見が、美しいカラー写真と情感のこもった解説文で紹介されています。一見、植物の入門編を連想する表題ですが、読んでみると専門の研究者も興味を引くような内容です。筆者が最も情熱を持って書いたであろうと想像されるガガイモの話が、私は最も面白く読めました。ガガイモの花が、吸蜜に訪れた昆虫の口吻を挟み込んで捕まえてしまう残酷な構造をしていることを、皆さんは知っていましたか？ ガガイモに近縁な、「キョウチクトウの仲間たち」の話もおすすめです。(東 隆行, 北海道大学)



### イネ科ハンドブック

木場 英久、茨木 靖、勝山 輝男／著 文一総合出版／発行 ISBN978-4-8299-1078-8

定価 1,680 円 新書判 146 ページ

皆さんもイネ科の同定に苦労された経験があまりでしょう。これまで線画によるイネ科の図譜はありましたが、写真によるイネ科の詳細な同定手引書はおそらくこれが初めてではないでしょうか。黒を背景とした小穂の拡大写真は見やすく、実物を調べる際になりわかりやすくなっています。また図解を伴った用語解説と検索表、見分け方の説明などに筆者らの工夫が伺えます。私が常日頃同定に苦労している *Poa* (イチゴツナギ属) は、広く分布する 6 種が載っているので、今季からは迷うことが少し減るでしょう。次はヌマイチゴツナギやザラバナソモソモなど北海道のものも含めた、「イチゴツナギ属ハンドブック」を個人的に期待しています。(東 隆行, 北海道大学)

